



2012年(平成24年)

9月号(No. 808)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

日中韓学生登山交流会に参加して

伊藤翼

日本・中国・韓国が持ち回りで企画し、三国の学生たちが山を舞台に交流を続けているイベント。今年は中国・武漢で開催された。参加学生が、来年の日本での開催への意気込みを含め、報告する。

日中韓学生登山交流会のきっかけは、今年5月ごろに受け取った「フライト料金だけで中国への遠征にいける」というメールに飛びついたことだった。自分の所属する大学山岳部にも参加を募ったところ1年生が参加の意思を示した。参加メンバーが決まり、役割が割り振られてみると自分は隊長となっていた。聞けば国の代表として歓迎されるという。その隊長というのはどんな仕事があるのだ

中国入り初日

ろうか。かなりの不安があった。メンバーの顔ぶれは、東海エリアの4人に関東エリア1人と知った顔がそろっていた。準備の段階ではやはり「芸、出し物」に一番悩まされた。装備や食糧、医療の計画など慣れたものだが、芸を考えると専門外。日本人学生は芸下手である。山やとなれば不器用・無愛想がまかりとおる。



参加者全員集合(写真提供=村越 稔)

中国武漢へのフライトを各自の負担として、上海空港。武漢への乗り継ぎ搭乗口前にはすでに韓国隊が時間をつぶしていた。学生の隊員は男性5人、女性5人。日本隊の倍の人数が揃っている。しかも半分は女子。印象はともさ

目次

日中韓学生登山交流会に参加して	1
追悼 茗溪堂、坂本矩洋さんを想う	5
日本山岳会への寄付金にかかわる税制などの説明	6
支部だより	7
青森支部／越後支部／福井支部／東九州支部	
図書紹介	11
ルーム日誌	13
会員異動	13
新入会員	13
図書受入報告	13
INFORMATION	14

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 ……10～20時
水・金 ……13～20時
第2、第4土曜日 ……閉室
第1、第3、第5土曜日 ……10～18時

のちにわかることだが韓国隊のほとんどは英語はもちろんのことで中国語も話せた。韓国隊の一人の女の子が日本に留学経験がありネイティブのアクセントで何不自由なく日本語で会話ができたが、その子は中国語も英語もできた。韓国隊は日本人が英語が下手なことを一瞬でよみとり、気をつかってくれてやさしい英語で話してくれたのがすこし情けなく悔しかった。韓

わやかで、日本で言う、いわゆる体育会系の大学生にはみえなかった。女子がとても元気で、さつさくの英会話に日本隊はとまどっていた。これから1週間この環境が続くわけである。ひるまず前にでる。頭をフル回転してリスニングとスピーキングを英語に切り替える。

国隊はこの交流会参加のために書類審査と面談に加え、実地山行2回の審査があったのだという。日本の学生との温度差を感じた。

武漢空港に着くと中国地質大学の学生が熱烈に歓迎してくれた。「中日韓大学生登山交流会」という赤い横断幕で一目でわかった。

一日早く武漢入りしている学生隊員の鎌倉源助と合流。地質大学は空港から高速で1時間30分ほど離れたところにある。山というような山はまだ全くない。途中でバスの窓から見た景色には驚いた。

日本では考えられないヒョロ長い建築中のマンションが都市部では密集して、市街地ではまだらに乱立していた。上海周辺でもそうだった。農地や空き地や昔の住居が急速に開発の圧力でコンクリート化していた。武漢の人口が約500万人。名古屋市の人口が約226万人。あのとんでもない数のマンション群に、住み手は埋まるのだろうか。

食後に中国の学生から散歩に行こうと熱烈に誘われ、ぜひにと武漢の街へでかけた。夜の九時をまわっても街の大通りは多くの人があふれていた。中心のシヨッピ



懸垂下降のデモンストレーションをする中国メンバー

ングセンター内のテナントのほとんどが22時まで営業している。巨大なネオンとLEDと液晶のエフエクトが武漢の都市力をアピールしていた。とはいえ、そこにいる中国人の人たちはあかぬけてないというか、人をおきざりにして異常な速さで商業施設が充実したような感じを受けた。

2日目の大学施設見学は大学に隣接する博物館からはじまった。恐竜の骨、鉱物など地球内部に関わる地質大学の成果が展示されていた。展示の説明はもちろん中国語であるが、漢字は日本人には親しみ深く、イメージもしやすい。駅も空港も博物館も案内板はなんと

なくわかってしまうので迷うことはなかった。

その後、一同は大学の体育館に移り、体育館の壁一面に展開する登攀設備を見学した。ホールドにびっしりとついた白い手形が設備に暇を与えていないことがわかる。一つの大学でこれほど大きなクライミングウォールを持つている大学が日本にあるのだろうか。改築のため、見るだけに終わったのが残念であった。

体育館の2階でプロジェクターとスクリーンで今回の活動のオリエンテーションと今年5月の同大学のエベレスト遠征の報告を聞かせてもらった。登頂した4人の学生のうちの一人が今回の交流会に参加していた。ミス・エベレストはチェンチェンといった。チェンチェンのプレゼンテーションは、氷河に梯子をかけて渡る困難さや高所の息遣いのつらさが伝わる素晴らしいものであった。

午後は東湖や揚子江へ観光にでかけた。日が暮れてホテルへ戻り、熱烈歓迎パーティが始まった。指定されていたホテルはどこも国営5つ星ホテルで、振る舞われた料理はどれも最高級品であった。

しかも毎度ものすごい量であった。皿がテーブルに乗りきらない。

中国入りして3日目

山間部への大移動が始まった。新幹線(時速約200km/h)で西へ二時間ほど、宣昌市でバスに乗り換え、北北西に3時間ほどの移動であった。2時間も内陸へ走っても山が一向に見えてこない景色は、同じような農村とたまにあの細ひよる長いマンション群ばかり。この滞在した1週間の間に思ったことは、中国には風も雨もないということ平野部は地形の起伏に乏しく、山間部も海からかなり離れ、大陸が大きすぎて結局気候の変化も乏しくなっている。風も水も淀んで湿度が高く蒸し暑い、それが中国のこの季節の印象であった。

バスで朝天吼という溪谷にやってきた。中国四大美人「王昭君」の故郷昭君の里をまわった。「日中韓大学生登山交流会」の横断幕が掲げられて、民族衣装に民族音楽で出迎えられた。

明日の朝、懸垂下降をするから日本隊から一人選べという。自分が参加することになり、明日の朝は先発7時出発となった。



神農架山頂にて。2999 段の階段を上る競争を終えたあと

翌朝、朝食をさつと済ませ乗用車に装備すべてを乗せて、將軍柱という大きな岩のふもとで降された。メンバーは中国隊がチェンチエンと甘文濤、韓国隊は背は高いがゴツくはない無口なチャンギユン・ユーそして日本隊からは私が参加する。

ロープを分担して持ち、急な階段のついた遊歩道を登っていく。30分ほどの登りと聞いていたが、10分で將軍柱の上部に着いた。固定懸垂下降のセットを見学した。山を懸垂下降しながら下りていくわけではないから、ロープエンドはこれでもかというくらい厳重に岩や人工の手摺に結び付けられて

いた。ボーライン知ってる？と甘文に話しかけてみた。知らないという。ますます技術交流のやりがいがあるのではないか。

セットが終わったらしく無線で降りてみると連絡がきた。肩慣らしに1本。60メートルダブルロープで空中懸垂下降。この高さはなかなか日本では体験できない。韓国のユーも「かなり高いな」と喜んでいった。もう一度登れというので登り返す。將軍柱の下の方からマイクの大音量が聞こえてきた。崖っぶちに立つと、下の方で他の大学生たちが米粒より小さく見えた。手を振っても見えるのだが、あつというまに4人終えた。

大成功だと中国隊が喜んでいて、ユーと自分はそんな実感もなく、下の状況もわからず日陰でロープをたたんでいた。

ほかの学生が登ってくるのを、待ち合流して將軍柱の裏山を登山することになった。中国特製昼食袋が配布され出発。40人ほどの大所帯行軍である。その裏山は落石が非常に多いガレた藪山で、小さな踏み跡が少しある程度。一般道と呼べるものではなかった。40人ほどの標高でピークがはつき

りせず、乗越のような峠で昼食と記念写真を撮ってさらに進んで下る。昼食パックはりんご、ソーセージ、パンケーキ、干し肉、乾燥餅であった。

下りは細かい砂利の急斜面が続いたので非常に長いフィクストロープを設置した。落石が多発したので「ワン・バイ・ワン」が連発した。事前にマウンテンブーツは不要と確認したのでスニーカーで来た学生もいたが、これはマウンテンブーツ必須の足場であろう。大きな風穴に寄って涼んでから先ほどの祭り会場に下山した。

下山してテントを設営して夕食。夕食後にキャンプファイヤーがあるから日本人は歌を歌ってくれということになった。アカペラの『上を向いて歩こう』は大盛況であった。あとから韓国の副代表から、なぜ君が『すき焼きソング』を知っているのかと聞かれた。あれは私が若いころ聞いた青春の一曲であったのだが、君の世代でも有名なのかと。

裏山登山の翌日は朝天吼ラフティング。朝天吼の最も有力な観光事業である。6キロの溪流を1時間半かけて2人用ゴムボートで下

る。注意を聞いたあとプロテクターをつけてボートに乗り込む。なかなかの激流ですぐにボートが水でいっぱいになってしまふ。素晴らしい溪流であるのだけれど、ただ残念なのは溪流の脇にはコンクリート採石所があつて大きなトラックが排気ガスと砂煙をまきちらし採石所から溪流に濁った水が流れ込んでいることであつた。

朝天吼までにも溪流のど真ん中に高速道路の橋脚を立てたりと、観光誘致の一番の売りである大自然が台なしであるのは日本と考える方が違うなと感じた。

山間部滞在最終日

神農架(3106メートル)という今回の企画のなかでもっともおもしろそうな山に向かうその途中のホテル前で、ルール説明とチーム分けがあつた。登山競争をするらしい。地質大学の先生らしき人が号令と掛け声を出している。後で聞いてみると「みんな金がほしいかい」「おう」であつたらしい。賞金がかかっているらしい。全員が順位に応じて賞金がもらえるルールらしい。1位のチーム100000元(10人チームで一人あたり1万

4000円もらえるという、2位は8000元、3位は5000元。複雑な気持ちであった。

その日は学生のみ神農架自然公園へ移動して、自然公園博物館のアーケードの下で野営となった。完全にフラットな地面に屋根がある。標高は1500メートルほどであったが風もなく半袖で過ごせた。寝袋も不要であった。

競争当日

麓のホテルに戻って朝食をとり、すぐバスで神農架へ移動。山道を1時間ほどバスで登ると、食堂のような広場の駐車場に着いた。山容は御嶽、朝日岳のような見晴らしがよいところである。標高は約2600メートル。この広場で準備運動、オープニングセレモニー、そしてその隊列のまま出発地点位置に移動してスタートであった。2999段の階段らしい。標高の高い大階段の経験はなかった。先頭集団はゼイゼイするほど飛ばして、あとは根性勝負になることは分かっていた。

スタートの合図で各チーム一斉にポジション争い。平地のマラソンとなんらかわらないスピード

である。登っては下るアップダウンの階段で慣れない者は、踏みはずして後ろに回っていく。

毎朝大学近くの裏山をトレランをしている私は、こんなペースがずっと続くわけではないとわかっていてもプライドが食らいつく。

日本隊の原祐貴と先頭集団にはりついていたが、一斉に歩きに切り替わったのでこちらも合わせてスローダウン。みなゼイゼイと息が上がっていた。まだまったく高度を稼いでいなかった。

見上げれば果てが見えない大階段が上の方でかすんでいた。つらくなってきた。原は根性で膝に手つきながら食らいついている。大脇盛生が後ろから順位をあげてきた。というより全体がペースを落としているのだ。一定のペースを保ってきた大脇は余力をラストスパートに残しているようでもあった。大脇の作戦勝ちである。

私は男子最後尾まで落ちて鎌倉とチュンチェンに励まされていたが給水ポイントでどうにか呼吸が戻ったので巻き返しをはかった。

結局中国軍の大勝であった。日本人の結果は30人中、大脇5位、原7位、伊藤11位、堀内晃13位、鎌

倉18位。韓国軍は12位からのランクインとなった。たった30分のレースであった。

負けたのだがうれしかったのは同じ大学山岳部の後輩が功績を残したからである。ここは地質大学のトレッキング場所らしい。アウェイでよくやったと思う。

こうしてプログラムのすべての山行を終え武漢に戻ることになった。登山というよりは簡単なアウトドア活動が主体であり、中国の大自然のなかで学生交流ができたというのは、ほんとうに素晴らしい体験であった。

ローテーションでいくと来年は日本で開催されることになる。日本には日本の素晴らしい自然があるのでこれを楽しんでもらわない手はないと思う。日本の自然は中国にくらべて繊細である。四季の顔を持ち、水も緑も豊かで、変化に富む。急峻な尾根、たおやかな尾根、世界一シルエットの美しい富士山など小さな国土のなかで、非常にバラエティ豊かな自然が楽しめる。

また日本人には繊細な心遣いや気配り、周りとの協調性があり、これは日本の秀でている点と感じ

た。その国民性でもって来年の開催国として学生を迎えられればよいのではないか。

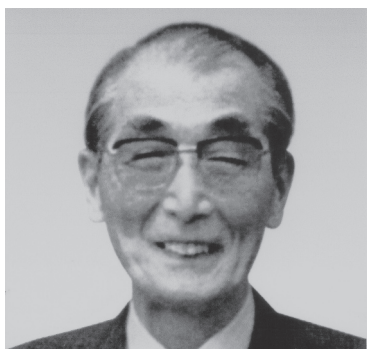
あとは語学によるコミュニケーションの壁である。中国と韓国がならん支障なく会話できているのに、日本だけがくすぶっているのは、語学で後れをとっている現状を否めない。

とはいっても仲間として交流会でふれあい、自分から話にかけば笑顔で応えてくれる仲間たちばかりであった。

現在の日中、日韓問題を解決できるのは、仲よく国を超えて交流できる僕たちの世代ではないだろうか。

メンバー表

	氏名	所属
団 長	中山 茂樹	日本山岳会 理事
副 団 長	高橋 玲司	日本山岳会東海支部 青年部 および岐阜登高会
記録担当	村越 稔	日本山岳会東海支部
隊 長	伊藤 翼	岐阜大学3年 岐阜大学山岳部 部長
副 隊 長	原 祐貴	専修大学4年 山岳部 部長
隊 員	堀内 晃	名古屋工業大学3年 山岳同人 鶴
	鎌倉 源助	名古屋外国語大学2年
	大脇 盛生	岐阜大学1年 岐阜大学山岳部



坂本矩祥 (さかもと・のりよし)
会員番号3639

1920年11月10日、東京・駿河台に生まれる。中学の先生に連れられ、上高地から常念岳、北アルプス裏銀座などを歩く。卒業後、仲間同士や案内人を頼むなどして、登山、スキーを続ける。大学を2年繰り上げ卒業したのち、1942年に召集。陸軍に入り、内地にて3年11カ月勤務。1946年頃、兵役後、父が明治20年頃に始めた茗溪堂の仕事を、引き継ぐ。1948年に株式会社となる。

1949年9月、日本山岳会入会 (会員番号3639、のちに永年会員になる)。

1949年から、『山日記』を発行。これを機に、日本山岳会に関連した出版物をはじめ、山岳書籍を多く出版、販売するようになる (本文参照)。また、書籍のほか、カレンダー、絵はがきなどの制作、販売も手がける。

『山岳』(Vol.99 / 2004)収録の「日本山岳会と茗溪堂」(坂本矩祥)、『山日記』五十三巻の足跡」(松丸秀夫、五十嶋一寛)に諸事詳しい。2012年6月24日、逝去。享年92歳。

茗溪堂、 坂本矩祥さんを想う

横山厚夫

先の6月23日、茗溪堂主人の坂本矩祥さんが亡くなった。ご子息の克彦さんから「父が……、91年と7カ月の……」と電話があったとき、私は深いお悔やみの念を抱くとともに、一つの時代が終わったことを思った。登山史においても一定の年月を画して特筆する偉業がなされた一時代があるように、

山の本の出版にも「茗溪堂の時代」という一時代があったといっても過言ではなからう。それは戦後の再生日本山岳会の充実期と重なり、名著と目される数々を生み出していった実り豊かな時代であった。

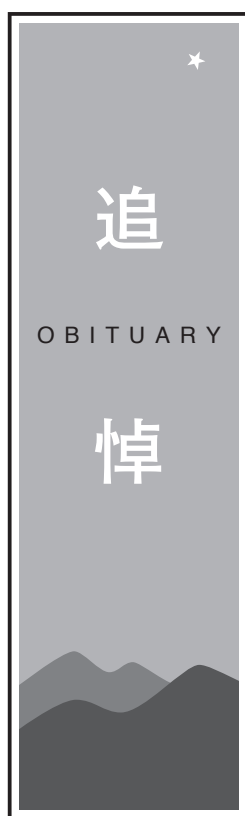
ひと頃は「日本山岳会出版部」といわれたほどの茗溪堂である。縁あって手がけるようになった1949年版『山日記』の発行を機に山岳会と深いつながりができると、坂本さん自身も入会し、以後『山岳』や会報をお店において販売を

助け、かつ会員が書く本の出版にも力を入れるようになった。『登山のためのスキー術』(林和夫 / 1950)に始まって、坂本直行、加藤泰安、望月達夫、藤島敏男、島田翼、三田幸夫、田口二郎などなどの著書である。みな内容はいわずもがな、造本も茗溪堂ならではの品のよさで喜ばれ、特装本はことに好評だった。毎度、これと決めた番号の特装本を求める愛好者が多かったとも聞いている。

ちなみに坂本さんは出版記念会も嫌いではなく、「坂本君は特装本と出版記念会のために本を作っている」とは、確か藤島さんの言。

茗溪堂はほんの2、3人のごちんまりした所帯だった。編集仕事は主に坂本さん一人で行ない、ときに外からの応援を頼むこともあった。私は望月さんの紹介で坂本さんを知るようになり、一時期、何冊かの編集にたずさわったことがあるが、それはまことに得がたい日々であったと思うのである。

御茶ノ水駅御茶ノ水橋口から目と鼻の先、地下1階地上5階の細長い茗溪堂ビルにはずいぶん通



追

OBITUARY

悼

つた。そして、三度に二度は坂本さんの「ジローに行きましよう」にあまえて仕事の打合せはそっちのけ、近くの喫茶店でのおしゃべりが無類の楽しさだった。下町は神田育ちの坂本さんには、いい意味での腰が低く人をそらさぬところがあつた。それゆえ臍曲りの多い会のお偉方も坂本さんとは心安く付き合っていたようで、そうした方々のけつして普通ではないエピソードが面白いこと限りな

った。藤島さんや望月さんは本作りに厳しく、よく叱られましたよ」とも聞いたが、なんのなんの、坂本さん独特の物腰のよさで、そんなウルサガタを毎度うまく懐柔していたふしもあり、そうした話をすると、坂本さんはとても嬉しうだった。いまでも、そのお顔が目

に浮かぶ。

なお、現在、茗溪堂は同じ神田ながら三崎町3-2-13に事務所を移して克彦さんがあとを継いでいる。とりあえず書籍の小売りはやっていないが山の本の出版は続けるとのことなので、第二の「茗溪堂の時代」到来を大きな楽しみとしよう。

■ 5

インフォメーション

日本山岳会への寄付金にかかわる 税制などの説明

財務担当理事 小林義亮

当会は4月1日、公益社団法人として新発足しましたが、それによる税制のメリットなどと、寄付に関連する事項について説明いたします。

当会会員が寄付を行なう場合や、支部・委員会が寄付を受ける場合、寄付を募る場合など、次の要領で行なってください。

一 当会への寄付について

企業が行なう寄付

企業が当会に寄付を行なった場合、一般寄付金の損金算入限度額とは別枠で、損金(経費)の扱いとすることができます。つまり、寄付企業は当会が発行する受領証(礼状)によって費用として処理することが可能になり、法人税が減免されることになります。

これにより、従来以上に企業などからの寄付が受けやすくなると考えられます。

個人が行なう寄付

寄付額から20000円を差し

引いた金額を、寄付金として所得から控除することができます(ただし上限の制限があります)。

寄付者は所得税の確定申告(毎年三月中旬)において、当会の受領証(礼状兼領収書)を添付して、寄付金控除を行なうこととなります。

ここで注意を要するのは控除が所得からであって税額からの控除でないことです。

なお会員が当会に納付する年会費については、寄付金控除(所得控除)の対象とはなりません。

金銭以外の財産の寄付

所有不動産や相続財産の当会への寄付については、国税局長の承認を得て、寄付者が譲渡所得または相続税に該当する部分を非課税の扱いにすることができます。

すでに、当会はこの制度を利用して猿投の森(愛知県瀬戸市)の隣接地の山林の寄付を受けました(東海支部)。

もし会員、または第三者から寄

付の申し出があった場合には、財務担当理事にご相談ください。

二 当会への寄付の手続き

寄付の申し出

または募金活動について

会員が使途を指定して寄付を行なう場合、寄付金控除(所得控除)の対象となります。寄付の申し出を受けた場合には、寄付者の氏名や寄付内容、目的、経緯、時期などの詳細を速やかに財務担当理事までご連絡をお願いします。

支部または委員会が、公益社団法人日本山岳会の名称により独自の寄付金を募る場合には、財務担当理事まで、その目的や使途、目標募金金額などについて、事前にご連絡をお願いします。

三 寄付金の受領について

寄付金または金銭以外の寄付を受領した場合には、当会の受領証を、会長名で発行します。事前に事務局までご連絡ください。

四 支部や委員会が講師料を支払う場合の源泉徴収について

支部や委員会が講演会などで講師料を支払う場合には、講師報

酬から10%の所得税の源泉徴収を行ない、90%のネット金額を現金で支払うようにしてください。源泉徴収した金額は、翌月10日までに、税務署または銀行などで、所定の「納付書・領収済通知書」によって納税してください。「納付書・領収済通知書」は、事務局にありますので、お問い合わせください。また1年間分の支払報酬額の一覧表を事務局に、12月末までに報告してください。

以上、ご不明の場合は財務担当理事までお問い合わせください。

支部

だより



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

青森支部

白神山地ブナ林再生事業

6月22日から24日まで、白神山地ブナ林再生事業を実施した。22日、JR弘前駅城東口前を8時出発、奥赤石林道ゲート10時30分集合。ベースキャンプ11時30分着。大天幕設営後、津軽白神ふれあいセンターの細川さんから作業の安全確保について説明を受けた後、午後の作業を行なった。

23日、雨のため午前・午後とも作業中止。停滞の間は、大天幕のなかでさまざまなご馳走をいただき、飽きる事はなかった。とくに、田代さん発案の天ぶらは美味であった。感謝です。

24日、雨のため作業を断念。登山道および作業地の状況確認のみ行ない、10時すぎにキャンプ撤収。11時頃、奥赤石ゲートで解散した。

この白神山地ブナ林再生事業は、1998年9月、初代青森支部長松島静吾氏と大森弘一郎氏が森林管理局青森分局と交渉したのが始まりである。また、櫛石山登山口付近という実施場所については、二代目支部長根深誠氏の意向が大きかったと聞いている。

1999年6月に、青森支部事務局長中村勉氏を中心に6名が現地調査。9月に、約20名で第1回の作業を行なったが、台風接近のため1泊のみで打ち切った。

2000年6月は、28名参加。早朝に、クマゲラがキャンプ地近くのブナの樹に飛んできた。9月は参加者20名。ブナ稚樹33本を移植した。

01年は中学生も参加し、6月は68名、9月は62名。

02年は高校生が参加し、6月は50名、9月は奥赤石林道の車両通行を認められ、参加者65名。



雨のなか作業地の状況確認を行なった参加者

03年6月は、高校生も参加し73名、9月は44名。野ウサギによる植樹への食害が目立った。

04年6月は52名、9月は44名。

05年6月は、日本山岳会創立100周年記念事業として実施。参加者は75名。ブナの苗約50本植樹した。9月の参加者は24名。

06年6月は43名、9月は25名。

07年6月は35名、9月は23名。

08年6月は31名、9月は19名。

09年6月は17名、9月は29名。

10年6月は14名。

11年6月は12名で、参加者が減少した。

今回も参加者12名と昨年同様過去最少で、作業も半日しかできなかった。2010年度からは会

越後支部

第55回高頭祭開催

員の負担を考え、春だけの実施にしていたが、今年度からは秋(9月29・30日を予定)にも、テントや食料を各自持ち込んで行なうことにした。

皆様の参加をお待ちしています。
(須々田秀美)

恒例の高頭祭を7月25日、弥彦山太平園地の高頭仁兵衛翁寿像碑前で開催。今年で55回目を迎えた。風速2〜3m/s、霧で視界が悪かつ

たが、越後支部会員や山岳会員約60名の参列があった。日本山岳会マナスル登山隊員松田雄一名、菅会員をお招きし、穴田雪江（首都圏）・宗實慶子（関西支部）会員も遠路はるばる参列いただいた。高頭祭に併せて、桜井昭吉自然保護委員長と会員による「清掃登山」も例年通り実施され、祭典に参列した。

14時30分、桐生恒治事務局長の司会で開祭。冒頭に山崎幸和支部長より、「雨ががあつたのも高頭翁のご尽力か。見守ってくださつておられるのではないか……」とあいさつがあつた。次に松田名誉会員、穴田・宗實両会員の紹介をされ、「高頭祭は越後支部の公益事業の一つです。短い時間ですが山仲間の親睦が深められることは、山岳会の発展に繋がります。また来年もぜひ参加をお願いします」とお話しがあつた。

神事は、平田大六前支部長が本職の神官なみに祝詞をあげ、お祓い、続いて玉串奉奠と厳肅に執り行なわれた。そして、穴田・宗實・佐竹秀子会員による寿像への御献酒。日本酒で寿像を清め、式典は終了した。

14時50分からの記念講演は松田名誉会員より、演題「高頭仁兵衛と藤島玄のこと」について、功績と思ひ出を次のように語られた。日本山岳会の設立にあたり、安心して運営できるか資金面の心配があつた。高頭の話（資金寄付）を聞いて、発起人はそれなら安心して続けられると決意した。

藤島玄支部長は身をもつての経験から、間違いない集成図を作成され、登山者に貢献された。飯豊連峰登山や、苗場山に大平さんの寿像碑を建立した。



弥彦山園地、高頭仁兵衛翁寿像碑にて

登山（海外）成功の秘訣は、ルート調査、メンバーの健康、天候予知（自然観察、ツルなどの飛行による）だ。山では常に自然を観察することが安全につながる、と語った。

記念写真撮影後、あずまやで越後の銘酒を味わいながら懇親会となった。弥彦山頂、御神廟前で開催される新潟県登山祭に参列のため、16時に移動。

17時、弥彦神社神官による「登山安全祭・松明登山清祓式」が執り行なわれ、各山岳会代表などにより厳肅に玉串拝礼が行なわれた。「弥彦松明登山祭」は、日本三大燈籠祭りの一つ「弥彦神社の燈籠神事」に新潟県山岳協会が協賛して実施、昭和29年から今年で59回目を迎えている。

18時すぎ、参加者はそれぞれ山頂から松明を掲げて、足元に気を配り神社へと下山。松田名誉会員グループは松明行進に参列のため、神社境内で合流。

20時、神社で社頭行事を受け、ボーイスカウト鼓笛隊が先導し、各山岳会は名入れ提灯を先頭に会員が並び、参拝者で賑わう街中を花火を見ながら弥彦駅まで行進し

た。そこで松明を納め記念品の贈呈が行なわれ、行事は終了となった。

解散後、弥彦の「綜栄館」で越後支部会員、地元の吉田山岳会等の有志による「松田名誉会員を囲む集い」を開催。和やかに親睦を深め、地元山岳会を労った。

26日9時、松田名誉会員と会員有志で長岡市深沢町の高頭邸跡、一画が寄付され、整備された河内公園（住民の総意で建立した「頌徳碑」が移設されている）を訪れた。そこで当時の東山連峰や魚沼、上越の山々の眺望を想像し、菩提寺

の正林寺に墓参して高頭翁の遺徳を偲んだ。

その後、山本五十六、河井継之助両記念館に入館し、越後長岡の常在戦場の精神、人間性とその生涯にふれた。

さらに、長岡市在住の室賀輝男越後支部名誉会員が、松田名誉会員にぜひお会いしたいと、体調のすぐれぬなか来館された。そこでお二人は懐かしく感慨深く会話をしていた。岳友の深い絆は、この企画にさらなる充実感と華を添えることとなった。

(本間宏之)

福井支部

支部長勇退感謝会と新任激励会

6月26日、福井ユアーズホテルにて、支部長勇退感謝会と新任激励会を開催した。長きにわたり福井支部をお世話いただいた宮本数男支部長のご苦勞に感謝し、森田信人新支部長の健闘を激励した。

宮本支部長は今年83歳。氏の福井支部への貢献は、まず20年前に福井支部を立ち上げることから始まった。事務局長となり、会員を



宮本前支部長に感謝し、森田新支部長を激励した

増やして福井支部を大家族にすることに貢献された。

個人的には、チベットの山を中心にたびたび海外の山に遠征、さらに日本百名山・三百名山を完登、福井支部を盛り立ててこられた。

福井支部として「親子登山」、登山の啓蒙、白山開山の祖・泰澄大師の偉業を称える「泰澄祭」や「泰澄ウォーク」を企画・実行した。また「里山作り」では、遊歩道の整備と植樹を行ない、公益社団法人としての山岳会の位置づけに貢献された。

昨年の20周年記念行事を無事終え、平成24年度からは、森田信人が新支部長となり、新しくスタ

ートすることになった。森田新支部長は新任のあいさつのなかで、「高齢者は、いかに人生を充実して送れるか。また若い会員はこれから長く生きていくうえでバックボーンになるべく人格形成をするための山を考えるような山岳会でありたい。これからは会員のほか友人家族を誘い、山行をしていきたい」と述べた。

福井県山岳連盟会長の牧野治生氏からは、「平成30年には福井で国体がある。ぜひ充実した国体になるよう、支部にもがんばってほしい」と激励の言葉をいただいた。

(辻岡正美)

東九州支部

第11回青少年体験登山大会

2002年の国際山岳年以来、毎年実施している青少年体験登山大会は、今年、11回目を迎えた。青少年や一般の初心者へ山へのいざないとして、東九州支部が取り組んできたものだ。今年も、子どもたちの夏休みの始まった最初の日曜日、7月22日に行なわれた。参加者は64名、うち小中高生24名、一般参加者30名、指導員(会員・会

友)10名であった。

登山口の牧ノ戸峠での出発前のオリエンテーションでは、加藤支部長が「みんなで楽しい山登りを体験してください」とあいさつ。続いて当日の登山コースや、日程の説明。3班に分かれ、A班「健脚組」は九州本土最高峰の中岳まで足を延ばして、B班「元氣組」は途中で星生岳にまわり道し、C班「のんびり組」は直行で、3班とも久住山頂で合流という設定。

各自の自己申告で班編制するが、のんびり組は38人にもなったため、さらに2つの班に分けた。

山中の注意事項などの説明のあと準備体操をして9時30分、A班から順次出発。

天気はいにくの曇り空。登山口から約20分で沓掛山の肩に着けば目指す久住山頂や遠く阿蘇の山並みも見えるところだが、雲に隠れてしまっている。それでも、子どもたちは元気に登っていく。このごろ山登りを始めたばかりという初老の夫婦も元氣だ。「降らず照らずで、一番良い山登り日和だ」などという声も聞こえる。

予定の12時ごろ、のんびり組が最初に久住山頂に到着。続いて健脚組も到着。その直前から、上空を被っていた厚い雲から大きな雨



久住別れで、青く尖った久住山頂をバックに

粒がポタポタと……。そしてすぐに叩きつけるような激しい雨足と、雷鳴。その雷鳴もすぐ頭の上だ。すでに弁当を開いていた人もあったが、危険を避けて直ちに全員下山開始。

雨も雷も10分足らずで終わったが、そのまま下って、久住別れの避難小屋前広場に全員集合。そこには、雨を避けて避難していた元氣組が待っていた。頂上で食べかけていた人も、まだ開く前の人、も、あらためてここで弁当を開く。その後、薄日の射し始めた広場で、青く尖った山頂をバックに記念撮影。

登山口へ全員が下山し終えたのが午後3時30分であった。昨年しも下山途中でわか雨と雷に出合ったが、今年も山の天候が急変。不安定な山の天気に遭遇、貴重な体験登山大会になったであろう。レストハウス前での解散式には、何かを成し遂げて満ち足りたという顔がいつぱい微笑んでいた。

皮肉なことにその翌日、九州北部に梅雨明け宣言。第6回大会以来恒例としている夏休み最初の日曜日に実施という設定は、梅雨明け時期と重なり、天気が微妙で不

NPO法人ライチョウ保護研究会 「市民会員」のご案内

NPO法人ライチョウ保護研究会に、「市民会員」というルールができました。

この市民会員のお世話は、担当理事の大森弘一郎がいたします。

市民会員ルールでは、名前、年齢、メールアドレスを、大森のメールにお送りいただくだけで、ライチョウ保護研究会にご入会いただけますので、ぜひご利用ください。(✉zero@qb3.so-net.ne.jp 大森)

会員には、メールを使ってBCCで役立つ情報をお送りします。ライチョウの生態やとりまく環境に関する資料・情報、講演会や観察会もご案内します。この会員には総会での議決権はありませんが、行事の参加には正会員と同じ特典をご用意いたします。

年会費は千円ですが、思いついたときに、下記の口座にお送りくだされば結構です。入会条件は、メールアドレスをもち、ライチョウや自然が好きということだけです。

ライチョウは高山にいる可愛い癒しの鳥であるだけでなく、氷河期の遺留種であり、絶滅危惧種であり、地球環境問題への先導役でもあるのです。そのような意味で、これから読みやすい長さの添付資料などを、いろいろお送りいたします。

・振込先/ゆうちょ銀行 一一八店

(普) 3492319 ライチョウホゴケンキュウカイ

(大森弘一郎)

安定な日が多い。来年以降の実施
時期の検討課題となろう。

(飯田勝之)



日本山岳会団体傷害保険 加入のおすすめ

加入対象者(被保険者): 日本山岳会会員の皆様
会員の方がご加入の場合、配偶者、お子様、ご両親、ご兄弟、会員ご本人の同居の親族及び同居の使用人の方も同時にご加入いただけます。

中途加入可能です。まずは、資料請求下さい!

海外登山の保険、その他損害保険・生命保険全般ご相談も承ります。

資料請求先

東京海上日動火災グループ代理店 株式会社東海日動パートナーズ東東京
団体傷害保険資料請求担当: 藤田 Maila.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp
TEL.0120-161-808 FAX.0120-161-809



図書紹介

土器屋由紀子、佐々木一哉・編著

『よみがえる富士山測候所
2005～2011』



2012年6月
成山堂書店刊
四六判 180頁
定価 1890円

10年ほど前に富士山測候所が閉鎖されると聞き、高所登山をを目指す山仲間たちと「何とか日本でも残して、高所順応と厳冬期登山訓練に使用させてもらえないか」と話し合った。日本登山学会のメンバーも、高所医学の実地研究には最適の場所であり、測候所跡の利用実現の具体的行動を模索していた。

一方、気象学研究者やオゾン、エアロゾル、宇宙線などを研究する大気科学研究者たちも、気象庁が独占している測候所が自由に使

用できることを希望していた。志を同じくする関係者は、NPO法人「富士山測候所を活用する会」を立ち上げ、一体となって動きだした。これは、広く開かれた研究施設として甦った経過と活動の報告である。

本書は2部構成から成る。第1部の富士山測候所の復活への道には、100年以上にわたる富士山での気象観測の歴史。関係官庁から、3年間の期限付きで夏季2カ月間の借用許可を取り付けた粘り強い交渉と、借用期間の延長などが記されている。

また、地上の影響を受けない高さの「自由対流圏」にある富士山頂が、北半球ではハワイのマウナロア観測所、スイスのユングフラウヨッホ観測所などとともに、大気圏観測として世界的に認められた重要な位置にある富士山測候所の意義と役割についても記してい

る。電源問題では、観測所の電源確保の歴史と苦心のすえ、自然エネルギーの活用やバッテリーの利用で、夏季のみならず年間を通してデータが即日研究所に届くようになったことにふれている。

第2部では、山頂で行なわれている研究を紹介。オゾン測定、自由対流圏の二酸化炭素の通年観測、雲と雨、エアロゾル、新粒子、有機エアロゾル、すす、水銀、宇宙線・自然放射線、雷・大気電気、永久凍土・植物生態、高所医学などについての詳細は興味深い。

高所医学では、①富士登山時の身体ストレスの解明とその有効活用、②睡眠時無呼吸・低呼吸の評価、③平衡機能、歩行バランスの評価、④酸化ストレス、抗酸化力に関してなど、測候所で得たデータに基づいた高所登山時の身体への影響などで、最新の解析情報を知ることができる。

科学者、医師、学者も自分たちで研究用の器材や食糧、飲用水を担ぎ上げ自炊しながら、さまざまな分野で貴重な研究成果をあげている。改めて、富士山測候所の価値を再確認できるだろう。

(南井英弘)

伴明、山田裕敏・共編

『雪線——創立九十年抄史』

雪線

2012年3月
大阪市立大学山岳会発行
B5判 424頁

旧大阪高商・商大を母体とする大阪市立大学山岳会の90年の歩みを綴った抄史である。

その歩みを振り返るとき、通常その基本となる資料は創立から現在までの部会報や日誌類であり、またときにはその活動の背景となつた山岳界全体の動向からもヒントを得るであろう。

本会は、まだ商大旅行部といっていた昭和の初め、当時結成された「関西学生山岳聯盟」への当初からの加盟校でもあり、その報告書など今は貴重な文献である。これらを体系的に、しかもバランスよく抄史にまとめられた編者の労苦がしのばれる。

内容は大きく四つの分野から構成されている。まず主流となつている部分は、会誌『雪線』の記録からの回顧であり、次に海外登山の変遷と記録、そして逝きし人た

ちへの追悼、最後に会員やOBからの随想の四分野からである。

巻頭に、『雪線』創刊号の表紙とその目次が見事なカラー印刷で刷り込まれているのが目を引く。

既刊の『雪線』からは、途中12号(昭和年)から22号(昭和40年)までは各号の目次とともにその内容の一部が抄録されており、この時代の会の動向を、読みとることができるといってよい。ただ初期の11号(昭和10年8月)までと、昭和41年以降の記録の多くをすべてカットしているのは惜しまれる。とりわけ、会の創立前後の動向や初期の活動記録は、今回整備しておくべきだったと思う。

本会の海外登山は、1960年代から5回行なっており、本書ではそのいずれも各報告書から抄録している。

本大学山岳会の海外登山で忘れられないのは、1961年のランタン・リルンへの先駆的な挑戦であったであろう。このとき不運にも隊長を含む3名(1名は日本マナスル登山隊初登頂時のサード・ギャルツェン氏)を雪崩により失うという悲痛な事故が発生している。詳しくは報告書による

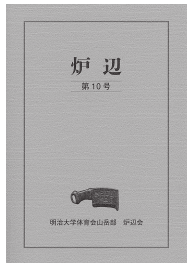
が、『山岳』第五十七(1962)年にも、当時の副隊長広谷氏の報告と、3隊員へ寄せられた追悼記事がある。

あれから半世紀を経た今日も、本会のランタン・リルンの氷河に寄する思いは尽きることがない。本書によると、新たなプロジェクトによるランタン谷の長期の探索をすでに始めているという。

その成果に期待するとともに、本「抄史」が、公式の百年通史への大きな架け橋となってくれることを願ってやまない。

(松家 晋)

明治大学体育会山岳部 炉辺会・編
『炉辺 第10号』



2012年6月
明治大学体育会山岳部
炉辺会発行
A5判 848頁

2003年5月16日、6名の隊員がアンナプルナーI峰の頂に立ち、明治大学体育会山岳部・炉辺会の「ドリーム・プロジェクト」は完結した。単一大学山岳部出身者による8000m峰全山登頂という壮挙は、植村直己のエベレスト日本

人初登頂を皮切りに、30年を超える長い時空のなかで達成された。

部員不足に悩む大学山岳部において明治もその例外ではなく、1992年度には部員が新2年生2名だけという創部以来最大の危機を迎えた。そこから部員・OBが必死になつて部を建て直し、新たな黄金時代とも言えるほどの充実した山岳部を取り戻す。

1992年度の新2年生だった高橋和弘は明治の若きリーダーに育ち、2001年には平均年齢25歳の若い隊を率いてガッシャーブルムI峰、II峰に挑んだ。海外登山が初めての者が2名いたにもかかわらず、77日間という驚異的に長い登山期間を粘りぬぎ、6名全員での8000m峰連続登頂に成功する。22歳の最年少隊員は綴った。「最高のメンバーで、最高の登山ができた——。僕の今までの人生で最高の瞬間だった」。

本年創部90周年を迎えた明治大学山岳部が18年間の部と炉辺会の記録をまとめた『炉辺』第10号には、エネルギーにあふれた時代の、若者たちの青春の情熱がほとばしっている。どうしてこれだけの力量を保ち続け、優秀な登山者

を輩出し続けられるのか。

この大部の部報のページをめくることが、その秘密の一端を知ることができる。今の時代においてなお、豪雪地帯の山で20日間近い冬季の合宿を毎年実践する。長きにわたって培われてきた「明治の山登り」を、変えることなく、厳しく守り続けてきたことが、世界にも誇り得る素晴らしい登山組織を育んだ。

継続の力は下界においても実践され、学生は年度ごとに山行報告や部運営の問題点を検討して記録した「年間報告書」を発行し、OB会は年に2〜4冊も「炉辺通信」を出し続けている。『炉辺』第10号の地下にはそれらの地道な積み重ねがあるのである。

大学山岳部関係者、現役山岳部員たちにぜひとも本書を手にとっていただきたい。私たちが明治から学ぶことはあまりにも大きい。

(松原尚之)



■8月の理事会は夏休みのため休
会でした。

ルーム日誌 8月

1日 自然保護委員会 青年部
2日 自然保護委員会
4日 三水会
6日 スキークラブ 委員会会議
7日 常務理事会
8日 01会 青年部 集会委員会
9日 山岳地理クラブ
20日 総務委員会 スケッチクラ
ブ
21日 図書管理委員会 休山会
00会
22日 自然保護委員会 麗山会
つくも会
23日 01会 スキークラブ
24日 委員会会議
28日 YOUTH CLUB
集会委員会 学生部 ルー
ム検討PT



30日 委員会会議 山遊会
31日 山の日制定PT YOUT
H CLUB
8月来室者 263名

会員異動(8月)

物故

浅輪幸久(4989) 12・8・19
三上智津子(8048) 12・6・30
菅家延正(13607) 12・7・21



著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
佐々木民秀・鈴木裕子(編)	韓国 老姑壇・月出山・弥勒山交流登山報告書	56p / 26cm	日本山岳会秋田支部	2012	発行者寄贈
田部井淳子	山の単語帳	192p / 21cm	世界文化社	2012	著者寄贈
西本武志	戦火に散った岳人たち	70p / 26cm	私家版(西本武志)	2012	著者寄贈
楨有恒	山行 : SANKO (中公文庫 No.933)	372p / 16cm	中公公論新社	2012	出版社寄贈
Sale, R. & Rodway, G.	Everest & Conquest in the Himalaya	231p / 24cm	Pen & Sward Books	2011	中村保氏寄贈
Sale, R. & Jurgalski, E.	On Top of the World The New Millennium	248p / 29cm	Snowfinch	2012	中村保氏寄贈

2012年7月号「図書受入れ報告」訂正

著者	書名	ページ/サイズ	発行元	寄贈/購入別
金澤康夫	山書と共に	321p / 21cm	金澤康夫(私家版)	著書寄贈

*このたび、当会図書室の蔵書をJACホームページ上で検索できるようになりました。

次の要領でアクセスしてみてください。

JACホームページ → 資料室 → 蔵書リスト → 会員パスワード → 蔵書検索

(会員パスワードは「会員ページパスワード申請」ボタンからご請求下さい。)

図書管理委員会

INFORM

インフォメーション



◆FULBARI シリーズ秋編

YOUTH CLUBの活動の一環、59歳以下の女性を対象としたFULBARIシリーズの秋編を開催。

詳細は Hitsuji Project ブログ
(<http://hitsujiproject.blogspot.jp/>)
につき案内。

■FULBARI Table 御岳

奥多摩・御岳の山岳宗教の歴史、自然環境について紹介。

日程 10月3日(水)19時より

場所 日本山岳会ルーム

定員 20名

費用 2000円

■FULBARI Trip to 御岳

日程 11月3日(土)～4日(日)

定員 20名

費用 宿泊宿泊費など1万円

◆北八ヶ岳の紅葉と苔むす原生林を散策

集会委員会

紅葉の盛りに、稲子湯から本沢温泉、東天狗岳、にゅう、白駒池

を巡ります。標準歩程9時間20分のトレッキングです。

日時 10月13日(土)～14日(日)

集合 13日11時5分 小海線小海駅

解散 14日16時30分 中央線茅野駅

宿泊 本沢温泉

費用 1万5千円

定員 15名

締切 9月25日

申込 征矢(そや)三樹

(TEL) 03(3770)4228

(E) soyamiki@td5.so-net.ne.jp

*申込者に詳細案内を送ります。

◆山岳図書を語るタベ——小泉弘

「装丁山味——山の本を装丁して」

図書委員会

デザインと山登りの「二足のわらじ」を49年、その間に小泉弘さんが装丁した山の本は500冊を超え、この春には著書『装丁山味』が出版されました。秋の夜、装丁の仕事の楽しさや難しさから、山や本への思いまでを、小泉さんに

じっくり語ってもらいます。

日時 10月26日(金)19時より

場所 山岳会 集会室

問合 三好まき子

(TEL) 090(8019)8601

(E) 344mm@mbe.nifty.com

◆第44回 新入会員オリエンテーションのお誘い

総務委員会

2011年9月～12年8月の

入会者が対象です。日本山岳会の

組織と活動状況、ルームや図書室

の利用方法の説明と山岳会グッズ

販売、各委員会・同好会案内など

を行ないます。

また、会長をはじめ各役員と同

期入会者の懇親会も開催します。

日時 10月27日(土)13時30分より

場所 日本山岳会ルーム

*対象者に別途ご案内いたします。

◆連続講演会 語り継ぐ日本山岳

会の歴史 歴代会長「あの頃、そ

して未来へのメッセージ」第5回

資料映像委員会

第21代会長の平山善吉さんをお

迎えして講演会を開催。内容を

DVDに収録する公開講演会です。

平山さんは、2003年度から

06年度の二期を歴任。日大山岳部

出身、山岳会には1956年に入

日大ヒマラヤ登山隊に参加、ムクトヒマールに初登頂する。95年には、日大エベレスト登山隊の総隊長として北東稜から完登。

任期中の05年に迎えた本会創立100周年記念祝典、祝賀会などの記念事業では、世紀の節目を飾られました。大任を果たした平山さんに、山岳会の長期展望などを語っていただきます。

講演会終了後「平山さんを囲んで懇親会」を開催(会費500円)。

当日、受付にて申し込む。

日時 11月17日(土)14時～

場所 山岳会 104室

定員 先着40名

問合 資料映像委員 羽田栄治

(TEL) 03(3399)3975

◆松田敏夫 山の原画展

山の現場で描いた絵の中から

選んだ13点と、シルクスクリーン

の新作を含めた20点を展示。

期間 10月19日(金)～30日(火)

(17時、月曜休廊)

会場 姉小路館ギャラリー

(TEL) 075(254)7902



特別仕様 完全限定受注生産プロトレックの頒布

前号でお知らせしました、日本山岳会特別仕様カシオ プロトレックの頒布を開始いたします。以下の要領でお申し込みください。期間限定ですので、ご注意ください。

●頒布価格 39,800 円 (税・送料込み) (参考上代 56,700円 (税込み))

●申し込み期間 2012 年 9 月 20 日～10 月 31 日 (支払い締め切り 2012 年 11 月 2 日)

●申し込み方法

① インターネットでの申し込み (当会 HP のトップページにもリンクあり) <http://www.e-casio.co.jp/jac/>

② FAX での申し込み FAX 03-6362-4311

③ e メールでの申し込み jac@e-casio.co.jp

※申し込み後、カシオマーケティングアドバンス株式会社から 3 営業日前後で受領の連絡があります (インターネットの場合即日)。受領の連絡がない場合申し込みは完了しておりませんので、再度申し込みください。

●申し込み記載事項

FAX、e メールで申し込む際は、下記必要事項を記載ください。

「日本山岳会 腕時計 (プロトレック) 申し込み」と明記し、①日本山岳会 会員番号 ②名前 ③届け先住所 (国内のみ) ④電話番号 ⑤会員番号刻印 要/不要 ⑥数量

●送金方法 ゆうちょ銀行ほか (申し込み受領連絡時に記載)

●商品の発送 2013 年 5 月中旬以降順次発送 (当会特別仕様のため、期間を要します)

・申込者と送金時の振替 (振込) 名義人名は同じにしてください。

・複数購入の場合も 1 カ所への発送となります。

・支払い後のキャンセルはできません。

●商品・申し込み方法の問い合わせ

カシオマーケティングアドバンス株式会社 担当: 迫 (さこ)、中村

電話 03-6362-4303 / FAX 03-6362-4311 / e メール: jac@e-casio.co.jp

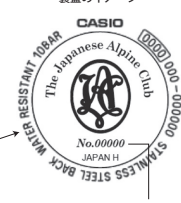
(受付時間: 9:30～17:00 土日祝日を除く)



PRW-5100



裏蓋のイメージ



会員番号不要でもかまいません。



ベルト先端のマークイメージ

電波受信機能 (国内・北米・欧州・中国地域)
ソーラー充電システム搭載
10 気圧防水
方位計測 (磁気偏角補正)
高度計測 (−700～10,000m)
気圧計測 (260～1,100hPa)
温度計測 (−10～60℃)
耐低温仕様 (−10℃)
フルオート LED ライト
色: ブラック
サイズ: H56.8×W49.3×D14.2mm
重さ: 79.6g
ベルト装着サイズ: 14.5～21.5cm

日本山岳会会報 山 808 号

2012年 (平成24年) 9月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイイツ四番町
TEL 東京 (03) 3261-4433
FAX 東京 (03) 3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上 昇
編集人 柏 澄子
E-メール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社

◆編集後記◆
●先月の上高地さんけん利用は4回。YOUTH CLUBの企画で15人の女性たちと1泊し、大正池から徳沢まで散策。その後仕事の合間に単身で1泊ずつ。穂高へ登りに行く男性と一緒したり、賑やかな集まりを終えたあとだというグループに出会った日もあった。お会いできるなんて思ってもいなかった遥かなる山の大先輩にお目にかかれたという「仕合せ」もあった。そしていつもそこにいてくださるのは、穏やかな内野慎一さんと元気凛冽なかおりさん夫妻。
●上高地を駆け足で通り過ぎていたもったいなさに、やつと気づいた。夕闇に山の端が消えていくさま、早朝の静寂な空気。これを味わえるのは泊まってこそ。みなさん、どうぞご利用を。(柏 澄子)